

E26

345

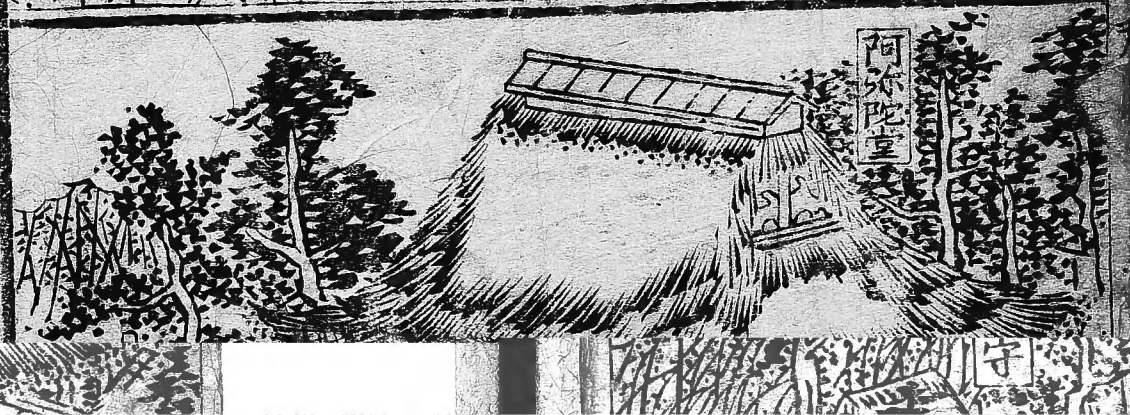
六阿彌陀  
諸

仁 明

六阿彌陀

如來傳記全

# 六阿彌陀詣



同御縁起略記  
 阿彌陀如来御傳記  
 永壽堂新刊

第一番

豐嶋郡

沼田村

真言宗

長福寺





六阿弥院  
傳記

東武上皇  
安徳天皇  
御紀傳乃東中  
皇四十九代聖武  
天皇御宇に東  
國武列を賜の郡  
至承平天皇之後

宰相た東門尉  
藤原清光を  
文武二國の  
豪士ありて  
紀伊紀伊  
権現とて  
化念たりき  
秋の夜半  
既く日  
く東國  
て武氏を

為る契ゆみあ  
世経破岸樓も  
あつた聖を  
りて人の心  
なるは海島現  
なるは海島現

樂をかく六阿弥院  
此の村を  
そ途とて  
上野に  
と始て



昇りて王法に來り  
 ありて執事と爲るを  
 得て根中堂に坐す  
 如來より言中を  
 うき威嚴を有る日  
 言に果てん生る  
 在盛とて後々田畑  
 村并に來るを寺に  
 禮し二處目と爲る  
 之れは之れなり



と能く其の美を  
新玉をく親を  
はるも別は之  
と号くを年月  
積りく配偶を  
めん次室は隣  
の玉に沼田活  
お痛は縁のそ嫁  
とむねは女元来  
嫁候と嫁ひな  
親の命かれを

西行庵の山堂の  
あふふ庭を  
烟糸の山を  
を洞にや中  
の境を

かく其の美に  
只さふ佛神  
候は縁のそ嫁  
とむねは女元来  
嫁候と嫁ひな  
親の命かれを

中世書す  
松名は  
とあ御さ  
橋の驛乃  
平家明神



第二番

明神の御心成り  
合掌 祈念と

も後天の事と  
荒川(河)を横た

座乃津とあり  
てと教とあり

神龜二年丑人  
六月朔日あり

奈くまをり即日  
死體成るふ付

女十二人を得  
るは娘乃れ頼

より別十二人  
荒川の園より

碑成るを  
今山あり板せんと

なく娘(女)を  
清光と名付すを

今とて海國の  
父の清光とて

石地(石)を  
款(く)を思ひの

清光(女)を  
巡洋(く)とて

巡洋(く)とて  
郡(く)を

郡(く)を

郡(く)を

郡(く)を

郡(く)を

郡(く)を

足立郡 元木村



観音堂

禅宗 應味寺



阿弥陀堂



檢校未就

主人乃善經義

念上彩之

倒置

光明赫奕

とて天司を奉

是將當山持

いんち  
の五本城あき

えうそ  
影向しふか

すきりぬくこと  
川入雲来とんは

くふん

德之遠矣

末葉の六代

在生海内賦

易人頌

志願と誓う者

東坡先生

我々もあまの

人形之哀愁

中

靈木可育余聞

此後臨上境

あすこ  
すこ  
すこ  
すこ

北山先生文集

長子須臾之令

七  
月  
一  
日  
家  
人  
共  
進  
晚  
飯

孟子曰

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

西松と遊ばず

一

生之樂之

乃  
 心  
 通  
 美  
 己  
 乃

此の如く

系下洋中

木香入心

其旨の如く  
 是れ下り  
 なるべし

水

張氏新

う  
い  
う  
あ

卷之六



必拜言

五

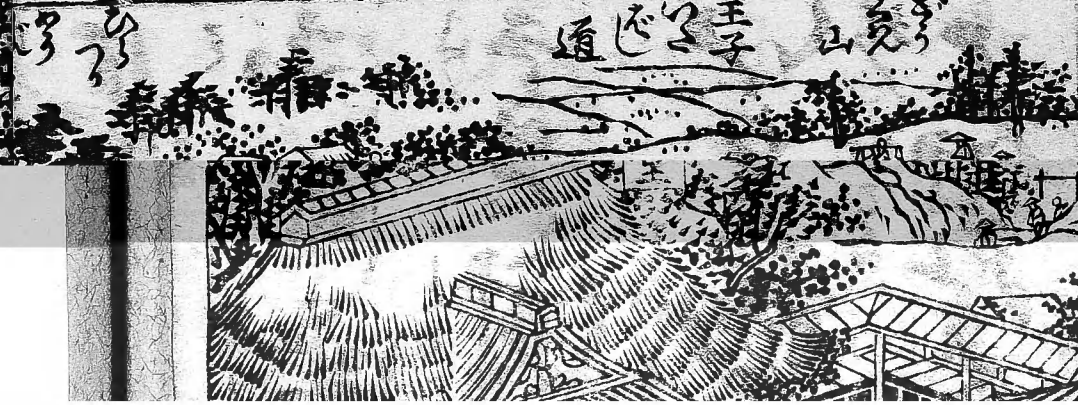
多分平國温田名  
 浦は海着せし先  
 舟と丹波とを  
 て繋ぎて人まゐ  
 るとく熊野浦へ  
 控ふしつねを  
 志すて海津に押  
 出たり行脚後  
 て中興と云ふ  
 事と侍りて思  
 ねば四浦は流る  
 しと要里人なり  
 禁地本といふ事  
 ありて下り上り  
 船と不光船と  
 ち敷里人といふ  
 と庄司といふ  
 ゆゑ早速と  
 見方に彼を来  
 たるは身忠元  
 ともなはる不快  
 ひある事候を

長福寺とて年番の  
 御佛あり尊容も又  
 言ふ所あり治の年  
 いふ所あり板敷あり  
 と云ふ所あり



大和郡

見たりあるを  
威儀神の候  
いんふ世事と  
候りもまはる  
力あはせえ  
上金ぬ其以  
行基菩薩像四  
氏救世なる法  
修りておろし  
東山寺の候  
とてふなりと  
てふなりと



てふなりと  
魚を獲ひて  
あつて乃ち  
本寺の  
足便の  
十三人  
あるが  
屋敷  
霊木  
多く  
刻を  
し平巳



第三

豊嶋

郡

西原

真言

宗

無量

寺

観音



此後

んにけり記の  
 事にて然野  
 多きとて神  
 勅をりて新  
 化候をまじ  
 べん原を蒙り  
 うゑ家とあ  
 まふもか  
 いは是を固  
 小初とてあ  
 まいざふま  
 五木と云居  
 あれ月とが  
 さひ公とい美  
 しき伴像六  
 を刻上る衣  
 司と秘の人悦  
 とはほはえ  
 其時秋花信  
 候し好光  
 ○墨本は老なり  
 わむ一抄  
 二六字

同治壬午春  
賽後手書  
櫻と染  
ひの河をくぐりて  
海に到るは  
常々少くも  
能く揚  
新いふ先たる也  
二番目赴き  
蕩々然あり  
上々林文山河越え  
東は山岡なり  
信也飛鳥なる



人

二人の追尋は夏

之曰多其亡女

接する處に

此の如く

他身ノ物ナシ

叔山六休

孫氏佛性宗の

救主を主として

用新おしえり

ちくへ彼を解す

出魂夜に仁果  
ふふふふふふ

のふりし家九族

出離生死遠矣

末也。平倭乃案。

2. 善權公教

及升言

福天大僧正兼侍

そなたのたのむ

あは  
えん  
さう  
さう  
わう  
あ

とく  
び  
と  
く  
と  
と  
と

一禮之水あり豊

五  
山  
心  
子  
集

競ふ  
 今  
 亦  
 禁  
 向  
 大  
 上  
 所  
 し

かき  
元木村の  
ゆき  
ゆき

三子如心應味守と



し道俗男女一  
蓮花生の如く  
存作するも  
な則ちあれ  
不と民助さん  
と向うを修む  
我まより有源  
の法六部と云  
今乃村里安  
ゆり上り  
乃餘本を里

と修めい  
利生あつた  
そと一修に其  
せり公思ふ  
持現存の源  
ふを表も  
ふられ女を  
ふられ女を  
乃然ふ  
むる因  
は程人の果

承子松茂  
つあふ堤を  
小萩庵わゆる小  
是頃私とく  
そのひり  
手平のま  
河と本餘  
立と性  
とり持  
村好  
乃法寺

乃法寺と  
村好  
とり持  
立と性  
河と本餘  
立と性  
とり持  
村好  
乃法寺



大井言

さくし地の隈 第四番

いかに女は水溺死 豊嶋

と梅あひむく 郡

は楽に梅あひむく 田畑村

あめはふくれふ 真喜

歌離はきよき 宗

とあきくは候求 與樂

津を梅あひむく 本堂

かきあふも花夜 寺

垂路はきよき 室

巧方便はきよき 室

あめはふくれふ 室

さくし地の隈 室

いかに女は水溺死 室

と梅あひむく 室

は楽に梅あひむく 室

あめはふくれふ 室

歌離はきよき 室

とあきくは候求 室

津を梅あひむく 室

かきあふも花夜 室

《年巳





仁年已

1



押さへて入地を下し  
 石炭を玉に神明  
 直高摘花を世に  
 橘場菊の花に  
 高錦の上を  
 隅に

堤きそ少成歌事と本  
 母寺梅天塚南ふ光  
 松来森とく此作の綱と  
 白盤の法神とて母氏  
 此より新成金成とて



光明皇后の御  
 尊統して天平  
 十七年大僧正  
 小任せしる僧愛  
 の御同大僧に大  
 菩薩号を賜ひ  
 延暦二十二月二日  
 泉光菩薩寺  
 東南院におきて  
 半之歳を期し  
 て寂し給ふ事

阿彌陀如  
 来御縁起

それ阿彌陀如来  
 も西方妙觀音  
 智大圓鏡智法  
 曼陀羅の教を  
 遺教を遠劫昔  
 在王如来思は  
 開人々金輪の位  
 美玉ひて沙門と

其のたれまふと  
 悔々千様に執持  
 極多其目を悦し  
 亦まふと清地寺  
 乃ふ以て村式も小

海と越へ龜井戸  
 水も之を清く  
 神教も多き古  
 物も小橋と波  
 亦ふと清地寺



ありしをては  
 比年よりま  
 超世の想を  
 五宗九教を  
 久き歲月を  
 ありしをては  
 累徳の修り  
 給ふへ末世  
 生仏を思ふ  
 艱難をむけ  
 唯まじりて  
 すてん成就  
 わき佛とい  
 正覺をまむ  
 を彼より半  
 乃まじりて  
 そのうち  
 其肉身十八  
 く悪徳のな  
 逆の者な  
 終ふ又世乃  
 之徳の捨る

常樂院  
天台宗  
下谷  
豐嶋郡  
第五番

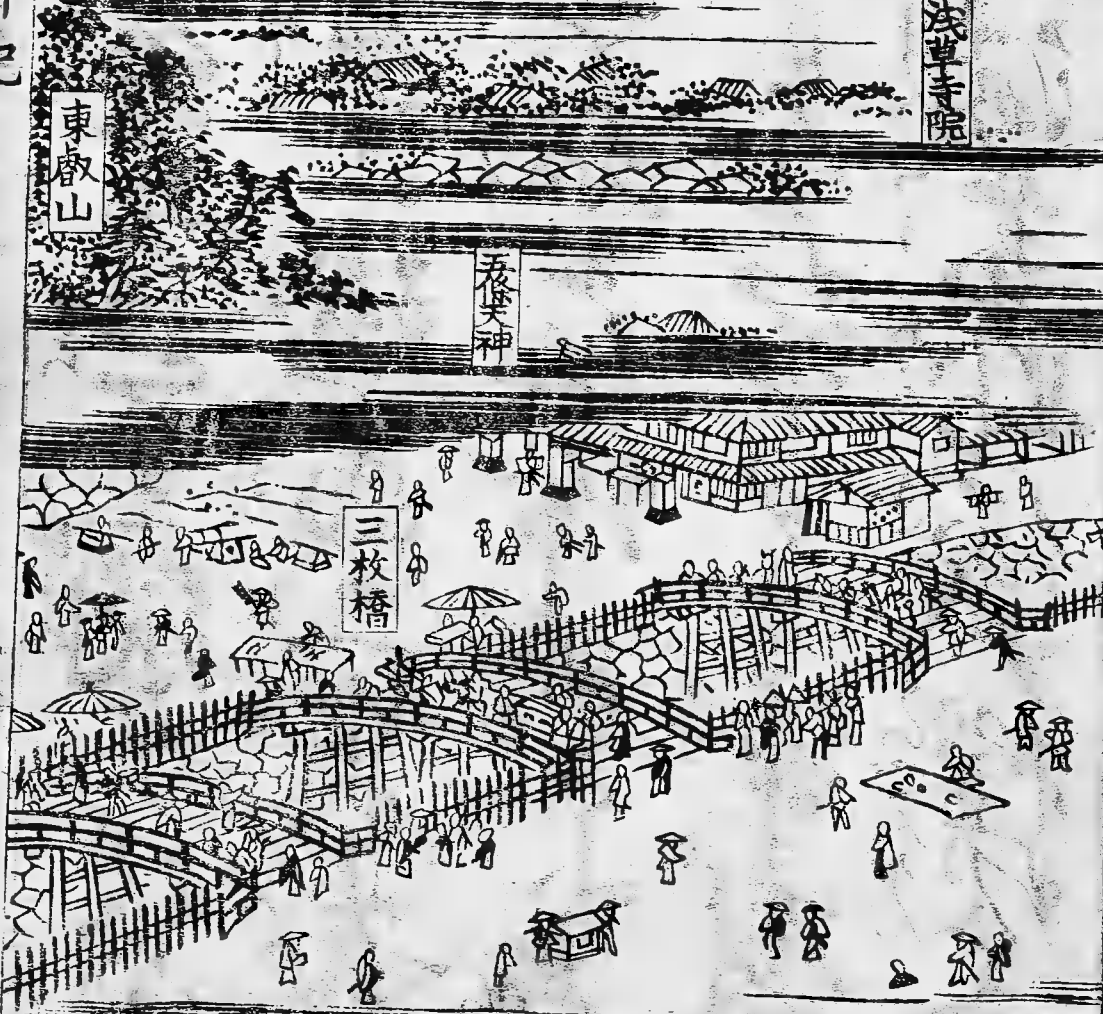
地燿  
藏廣  
堂



浅草寺院

五條天神

三枚橋





女を成仏と

いふはあまを

のまかりてわ

うふふふふ

有徳有情を

うふふふふ

因事て佛果を

うふふふふ

わふふふふ

来り其功徳成

て歡喜して候

はわふふふ

一乃諸聖を

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

うふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふ



六方恒河沙を  
 諸佛に託の弘  
 誓乃ひあや  
 ざる證據なき  
 かのくまを  
 世に教へしを  
 わくは舌の  
 爛るゝか  
 道に成るゝ  
 心はなるを  
 復令て来たり

族<sup>うぢ</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>はな</sup>れと<sup>かへりて</sup>  
多<sup>おほく</sup>に罰<sup>しかり</sup>と蒙<sup>あひま</sup>  
べすとて往<sup>いそいで</sup>來<sup>きたり</sup>け  
<sup>ふらにいんよりうち</sup>  
院羅尼神咒の歌  
<sup>めんろふうきく</sup>  
み庵囊謨乃文  
<sup>もんがや</sup>  
字成つたとき一  
こゝろ唱<sup>とな</sup>えたるふ  
さかちから陀<sup>だ</sup>と  
<sup>らい</sup>  
礼する水のそと  
よりそれくれ佛<sup>ほとけ</sup>  
と供養<sup>くよう</sup>せんとす



弘法三法王

の師匠を師本

佛を六諸宗

孫陀を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

尊を尊を尊を

第六番

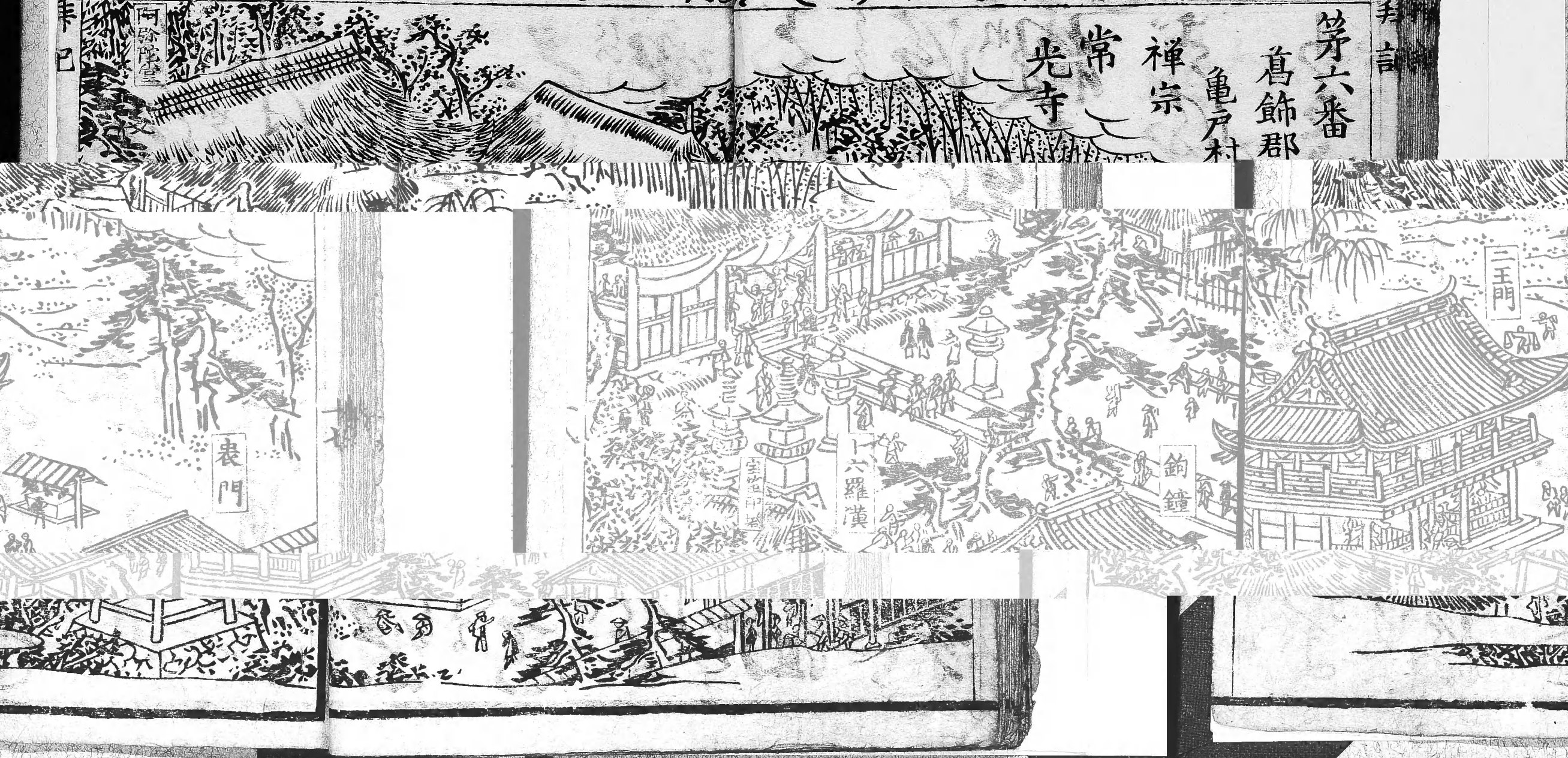
葛飾郡

亀戸村

常

光寺

光寺





十二の法名あり  
 普放光佛。無  
 量光佛。無等  
 光佛。無對光  
 佛。炎王光佛  
 清淨光佛。歡  
 喜光佛。智惠  
 光佛。不斷光佛  
 難思光佛。無  
 稱光佛。超日  
 月光佛。已上

須臾由楊柳  
 大獲めあふ春林百  
 樂を極めくし

前川武

後で其の  
 ふざけ



